

同志社大学国文学会彙報

昭和四十六年度国文学会役員

会長 土橋 寛

常任委員 南波 浩、小森 啓助

安永 武人、広川 勝美

駒 木 敏、壬生 博幸

星 田 公一、江野 幸治

生形 貴重、広 田 収

本 田 正行、沢 井 道夫

評議員 二十八名

會計監査 宮 下 隆夫、浅野 敏彦

昭和四十六年度国文学会活動状況

△国語教育研究会(六月二十日・教育文化センター)▽

国語科における公害教育 塹 江 美沙子(彦根南中)

民話教育 山 木 正明(和歌山石垣小)

文学教育―オッペルと象―

加 藤 昌 孝(同志社香里高)

総括―国語教育の問題点 徳 永 光次郎(桃山学院高)

△総会、研究発表会(十一月二十一日・教育文化センター)▽

文学教育―ガルシンの「信号」

山 中 典 子(京都府大宮中、五十川分校)

漢語と和語 浅野 敏彦(院修了生)

紫式部と道長夫妻との交情 南波 浩(教授)

昭和四十五年卒業論文題目

△古代文学前期▽

防人歌の諸問題 江川 むつ

山上憶良―万葉歌人としての特異性― 古賀 康子

防人歌の研究 小久保 紀子

額田王論 増田 啓子

山部赤人 松原 裕子

上代人の他界観 小川 洋子

額田王論 鈴木 安子

万葉集東歌―その民謡性と抒情性の考察― 上 柳 正子

人麻呂挽歌 采野 吉則

虫麻呂試論 山 下 美保

靈異記説話について―説話文学の成立と方法・序説

滝井 幸雄

国造り英雄の神話―古事記のオホナムチ物語―

筒井 利弘

△古代文学後期▽

紫式部日記―紫式部の文学について―

木村 楊子

伊勢物語「恋愛における昔男の姿」

吉沢 春子

源氏物語「明石の上」

高橋 真喜子

和泉式部論

矢野 輝子

更級日記に見える作者の自画像―浪漫的精神とその崩壊―

山本 裕子

枕草子にみる美意識

梅 鉢 明英

宇治の大君―男性拒否の心情について―

高 良 瞳

紫式部論

高 畑 宏

浮舟論―入水と出家の持つ意味―

鈴木 久恵

浮舟論―出家に至る過程―

佐藤 美耶子

「紫式部集」の世界―「紫式部論」構築の一試論

齊 藤 昭

「柏木」

越 智 佳子

「理想像としての紫の上とその死」―「源氏物語」より―

岡田 庸子

竹取物語

小川 知枝

藤壺宮

中島 栄子

伊勢物語論

中川 一美

「和泉式部日記」を通してみる和泉式部の女性像

森 田 明子

「かげろふ日記」―はかなしの世界とそこにみられる不幸の原因について―

神代 万寿美

竹取物語論―その文学的虚構を中心に

釘宮 照代

孝標女と「更級日記」―夢についての一考察―

久保山 キノエ

若菜卷私解―悲劇の構造と意味について―

小 堀 修一

「蜻蛉日記」の一考察―執筆の必然性―

小 林 英子

竹取物語論

加 藤 孝子

橘姫物語

飯 塚 仁司

紫式部「源氏物語」著作動機について

藤 川 隆子

「蜻蛉日記」にみえる愛と懊悩―創造的文学性の一面―

本 多 真知子

蜻蛉日記成立の契機について

林 田 久美子

源氏物語「紫上」―理想性の崩壊―

阿 部 美津江

△中世文学▽

「保元物語」と「平治物語」―その相違について―

今 村 雅子

承久記諸本について

黒 川 七 絵

「徒然草」における兼好

畑中美知子

中世文学に表われた義経伝説について

福永豊子

御伽草子―文正草子を軸に中世商人の生き方追求―

平家

山崎忠宏
佐伯なをみ

西行―その文学と宗教―

福里美美子
松永紀美子

「徒然草」に見たる隠者としての兼好

古野啓子

「つれづれ草」の美意識

井村恭子

平家物語における清盛像

甲斐まさ子

「平家物語」はなぜ国民愛誦の古典になりえたかについて
の一考察

片山常子

つれづれ草の「笑い」について

岸戸由子

「宇治拾遺物語」の考察

古林真弓

「御伽草子」論

西村正

徒然草における説話について

西山洋子

徒然草―兼好と人間社会―

岡崎要子

謡曲文学―平家物語にみられる世阿弥の思想―

西鶴の方法―「諸国ばなし」、
「懷硯」に関して―

瀬戸委

蕉風俳諧の成立

瀬戸委

世阿弥の能における美意識―和歌を中心としての考察―

「好色五人女」

芝山陽子

心中天の網島

諏訪幸子

平家物語にみる人間的感情の一面

心中天網島

諏訪幸子

篠田優子
塩紀子

西鶴に於ける咄の方法、試論

塩田貞雄

坂口安吾の世界

藤井千世

雨月物語の怪異について

鈴木健

三島由紀夫論

藤本憲一

近松の世話浄瑠璃―心中物における悲劇の方法―

竹淵直美

『有島武郎論』

石松みや子

異典子

井上靖論

伊藤恭正

雨月物語の特質

上田悦子

恭次郎とダダ

岩田明文

『武道伝来記』にみる西鶴の方法

山田悦子

深沢七郎論―人間の原点を探る文学について―

河野宏美

芭蕉紀行文の芸術性

山田治

志賀直哉

木村容子

好色五人女

山本岳成

幸田露伴―その孤高性

前山幸子

近松門左衛門と「心中天の網島」

吉江節子

「聖家族」の成立と、これにレイモンラデイゲ

的川俊夫

「世間胸算用」における笑い

芳木健憲

のあたえた影響

壬生博幸

芭蕉の芸術生涯

源嶋真一郎

破戒成立の諸問題―緑葉集から破戒へ

溝尻洋明

蕉村論

喜田時子

高見順論―その作家的出発をめぐって

永松恵子

「好色一代男」論

松井秀幸

三島由紀夫における文学の意味

永田範子

芭蕉における無常感の成立と展開

佐藤泰憲

戦後の伊藤整

能勢洋一郎

松尾芭蕉論

沢野唯志

宮沢賢治論「銀河鉄道の夜」を中心に

能勢洋一郎

〈近現代文学〉

大宰文学を支える倫理

柿本佳代子

大江健三郎論―現代における人間の生き方の追求

篠原美和子

織田作之助文学論

新金隆夫

中野重治―「村の家」から「梨の花」へ

田口明子

梶井基次郎―その短編の世界―

後藤和子

「他人の顔」論

高橋敏子

島崎藤村論―新生を中心に―

平山美重子

芥川龍之介論―私小説への傾斜

中原中也論―「在りし日」を追って

有島武郎の童話論

三好達治詩研究―三好達治の詩作上に底流する「思想」

坂口安吾

舟橋文学―感性の世界

夏目漱石―前期文学の意義

坂口安吾論

北村透谷小論―文学の自律性に向って

武田泰淳考

三島由紀夫論

田宮虎彦―人と作品

高村光太郎の生涯―人と作品

プロレタリア文学と亀井勝一郎

萩原朔太郎論―「無用の人」朔太郎

中野重治論―その創作主体の回復

△国語学▽

「宮古島方言」の言語地理学による一考察

雅俗折衷体の性格

常田みち子

辻 和 江

鶴 飼 恵 子

渡 辺 均

矢野奏鳴美

萬 待 子

吉田久美子

吉田 則 子

鮎 谷 厚 子

岩 田 裕 規

尾 辻 誠 広

辻 俊 広

八 木 秀 行

松 島 繁 行

佐 伯 信 子

佐々木陸浩

池村美知子

野 口 幸 子

「あぐらをかく、その他の語」の言語地理学的考察

奥 里 恵

中世軍記物語の擬音語、擬容語

大 岩 信 久

編 集 後 記

第七号は全体として比較的若い世代の人たちの清新な論文集となつた。その内わけは、古代前期一篇、古代後期一篇、近代三篇、近代文学研究資料一篇である。そのうち高良瞳さんのは、四十五年度の卒業論文を圧縮したものである。一号から続いてきた安永教授の「戦時下の文学」と題する論稿は、終つたのではなく、次号からまた引き続いて掲載の予定である。ご期待を乞う。

大学はどうあるべきか、文学研究はどうあるべきか、何のためか、どのような研究をすべきか、今日の歴史社会の条件が要請している問題意識を見究めつつ、ねばり強い追究の中で、創造活動のよき成果を期したい。

この機関誌がどのような歩みをつづけるかは、一に若い人びとの肩にかかっている。今後とも精進と協力を期待したい。(南波)